

豊かな言語感覚へのアプローチ

～「ひょうたんからコトバ」を生かした言語活動の日常化への取り組み～

横浜市立茅ヶ崎東小学校 金子 実

1. 子どもの実態と培いたい「生きる力」

本年度は3年生を担当している。本学級の子どもたちは興味を示したことがらに対して、友だちに聞いたり、一緒に調べたり、担任へ質問に来たり、時には自宅で本やネットなどで調べるなどの姿が見られる。そのような中で子どもたちの会話を聞いているとはやり言葉を日常生活の中で使っている様子が見られ、子どもたちが時代の流れの中にいることを感じた。

短歌や俳句などについては、「五七調」という言葉は知らないものの、そのリズムには馴染みがあるようで、標語作りなどでは文字数を数えながら楽しそうに作る姿が見られた。

今回の学習指導要領の改訂で新たに加わった「伝統的な言語文化に関する事項」では、「易しい言語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」とある。その内容をくわしく見ると、「『易しい』とは意味内容がわかることであり、『文語調』とは日常の話し言葉とは異なった特色を持つ言語体系で書かれた文章の調子のことである」とされている。また、「短歌や俳句を自分で作ってみたいという気持ちを持つように指導することも大切とされ、実際に作ってみることで、よさを実感し音読することの意義を深く理解することになる」ともある。

そこで、本学級では「短歌・俳句」を学ぶ際に、視覚と聴覚に訴える取り組みをすることで、より豊かに学ばせることができるのではないかと考えた。

以上のことから本年度も、言葉が持つ重さを感じ取ったり、言葉が持つイメージを学ぶことを通して言葉をより身近に感じ、実際に短歌や俳句を作ることで、日常化につながる実践に取り組むことにした。この学習を通じて付けたい力は次の通りである。

【培いたい力】

(社)感じる心・・・自然の美しさや季節の移り変わりを感じ、文作りに生かそうとする

(知)言語力(ことばの力)・表現力・言葉が持つ意味を理解し、学んだ言葉を生かして表現することを楽しめるようにする。

2. 番組について

この番組は、「故事成語」「ことわざ」「俳句・短歌」「慣用句やいろいろな日本語」の4編で構成されている。そこで番組内容を教科書と照合したところ、3年生では「声に出して読もう(短歌・俳句)」「季節の言葉(短歌・俳句にしてみる)」「かるた(百人一首)」が、4年生では「季節の言葉(短歌・俳句にしてみる)」「慣用句」「故事成語」が小単元として設定されていることがわかった。そこで本年度は「俳句・短歌」「慣用句やいろいろな日本語」を中心に活用することにした。

「短歌・俳句」は、情感が込められた朗読と作品に合わせた美しい映像が素晴らしい。わずか数分のことであるが、教室を作品の世界に誘ってくれるとも言える。従ってじっくり視聴することを大切にすることで、自然の美しさや季節の移り変わりを感じ感じながら作品作りに取り組んだり、自分が持つイメージの言葉探しに役立ったりするものと考えた。

「日本語いろいろ」では「慣用句」をはじめとして「季節のことば」や「言葉あそび」を紹介することで、多様な日本語の表現を紹介している。これは身の回りにある様々な言葉の意味を知り、言葉への関心を高めるきっかけとなるため、子どもたちの日常会話の中で使われていくことが期待できる。

3. 実践

(1) 視聴方法

本校では「朝の会－朝学習－1校時」というように、「朝学習」として1校時前に15分の学習時間を設定している。そこで「朝学習」を番組視聴にあてることで年間20番組を視聴する計画を立てた。そして学習単元に合った回を1校時の国語の授業につなげた60分で学習を構成することにした。

3年生で番組を全視聴する理由は、毎回の番組にテーマがあり、四編をそのテーマに合わせてつくられているからである。四編のうち「故事成語」と「ことわざ」は本校では4年生対象となることから、本学年では学習としては扱っていない。しかし、本学級では15分間全部を視聴した。これは、昨年度4年生での実践の際に「子どもたちは集中して視聴しながらも、学習で活用する場面と楽しみな

がら学ぶ場面とを区別しながら視聴できる」ということと、同一テーマによる言葉に対する学びの広がり期待してである

(2) 培いたい力との関わり

今回活用したのは、「短歌・俳句」と「日本語いろいろ」である。「短歌・俳句」ではアナウンサーによる朗読が音韻を大切に読み上げられ、その後で作品の解説がされている。しっとり落ち着いた読み方は子どもたちにとって模範となり、解説は紹介される短歌や俳句の意味を考える上で参考になる。そして、紹介される短歌・俳句に合わせた映像は、言葉と情景の関係と共に、自分がイメージした情景を言葉にするヒントを教えてくれている。朗読は二回あるので、一回目はじっくり聞き音韻の良さを感じ取る場とした。解説と画面は番組を生かしてそのまま視聴し、二回目の朗読時に番組のナレーションと共に声を出して読むことで音韻をつかむ場とした。こうすることで作品を考えたり発表したりするときに、「五七調」を意識して考えたり作品を読み上げたりすることにつながると考えたからである。「日本語いろいろ」では季節の言葉以外の様々な日本語表現について知っていることを再確認したり、新たに学ぶことができるきっかけとして視聴した。放送予定を見ると「季節を表す言葉」は、第3回の「春を表す言葉」と第16回の「縁起物の日本語」である。これは教科書に出てくる「小单元」と一致するので、そこで扱うことにした。

(3) 実践事例「季節の言葉『冬』」

◎学習の流れ

- ① 教科書も見ながら、「年末」「正月」「節分」に関係ある言葉を発表し合う。
- ② 教科書で紹介される俳句から季語探しをすることで、「季語」は季節の言葉であることを知る。
- ③ 季節の言葉を「季語」として使い、俳句作りをする。
- ④ 作った俳句を紹介しあい、表現のよいところ、工夫したところなどを話し合う。

この中で、季語探しの時に朝視聴した俳句も加えた。また、紹介し合う場面では、短冊型に切った画用紙にフェルトペンで書き、一句ひねる雰囲気を出した。俳句作りの時間には7～8分ほどの設定だったが大体は書き上げることができた。中には二～三句作り選んで清書した者もいた。作品を見ると、子どもらしいものが多い中で、なかなかと思わせるものもあった。以下、いくつか紹介する。

| | |
|-----------------------|-----------------------|
| 「お正月 子どもがまっている お年玉」 | 「こま回し 止まるな回れ いつまでも」 |
| 「お正月 除夜のかねの 初願い」 | 「雪とけて かわいいつぼみが こんにちは」 |
| 「除夜の鐘 なり終えたあとの しずかさや」 | 「初雪や 正月いっぱい 息白く」 |
| 「除夜の鐘 なれば今年の はじまりだ」 | 「風強し とぼしに行こう たこあげに」 |

4. 実践を終えて

5月に「季節のことば」を学習した時は、食べ物や植物の名前などを「その時期にあるもの」としてとらえ、それがその季節を表す言葉というとなかなかできなかった。しかし、第3回の「春を表す言葉」を視聴したことで、「ふきのとう」や「たけのこ」など知っているものをあげることができた。知っている言葉を季節の言葉として使ってよいことを認識するといった、映像が持つ力が子どもたちのイメージを広げた証である。

「俳句作り」をした後の感想では、「楽しかった」と「難しかった」が半分ずつであった。しかし難しいながらも「でき上がって楽しかった」との感想もあり、17文字の句を作る難しさを感じながらも作り上げる喜びを感じることができた学習となった。また、俳句の学習の良さとしては、「思ったことが書きやすい」「お互いの思いを交換し合い」「きれいに書くと作品が美しい」「言葉に気持ちをこめられる」「17文字での表現がすごい」との意見が出された。

以上のことから俳句を作るのは大変だが、それを乗り越えて書き上げる楽しさを知ることができた他、「詩集」作りの学習では「短歌・俳句集」を作りたい、自分の句集を作りたい、という声もあがった。また、子どもたちとの話の中に「これって、季語になるかな」といった話題があがるようになった。

今回の実践では、俳句作りの実践が1月であったため、現在も俳句作りを継続しているが、子どもたちの中に「季節の言葉さがし」「一句ひねる」といった活動が定着しつつある。

今後の予定としては、「俳句」だけでなく「短歌」作りもして、自然の美しさや季節の移り変わりを感じながら楽しんでいきたい。